

さんしゃ Zapping

Vol. 31 No. 1 (通巻 181 号)

2016 年 5 月

＜産社学会 ニュースレター＞

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186

E-mail: s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp

<http://www.ritsumei.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔目 次〕

＜新任紹介①＞

着任のご挨拶 金山 千広 p. 2

着任のご挨拶 三笥 利幸 p. 4

「これから」を創っていきたい。若者たちとともに。 田尾 直樹 p. 6

＜自著紹介＞

「ナディン・ゴードイマが描いた南アフリカ社会」 坂本 利子 p. 8

「テレビが見世物だったころー初期テレビジョンの考古学ー」 飯田 豊 p. 11

< 新任紹介① >

着任のご挨拶

かなやま ちひろ
金山 千広



4 月からスポーツ社会専攻でお世話になっております、金山千広(かなやま ちひろ)と申します。スポーツ方法実習の「アダプテッドスポーツ」をはじめ、「子どもとスポーツ」「障害者とスポーツ」「スポーツと現代社会」「プロジェクトスタディ」「基礎演習」を担当させていただきますことになりました。

まだまだ戸惑うことも多く、諸先生方や事務関係のみなさまにご負担をおかけしておりますが、スポーツ社会専攻の先生方はじめ、ご関係のみなさま方に温かく迎え入れていただきましたこと、心より感謝申し上げます。たく存じます。

私は、スポーツマネジメントの観点から障害者スポーツの普及のための課題を発見し、解決方法に焦点を当てた研究を行っています。近年、障害のある人のスポーツは、アダプテッドスポーツと言われるようになってきました。この発想は、人の身体能力、年齢、障害の有無などにとらわれず、ルールや用具を工夫して、その人に適合させたスポーツを展開することと理解されています。また、その実践には「公平」「参加」を重視した誰もが参加できるユニバーサルデザインや、障害の有無を超えて全ての人を包摂するインクルージョンという発想が必要になります。

例えばユニバーサルなスポーツ種目としての「風船バレー」は、チーム全員が風船に触れてから 10 回以内に相手のコートに返球するというルールで行います。また、国体後に開催される全国障害者スポーツ大会のオープン種目である「卓球バレー」は、ネットを挟んで 1 チーム 6 人ずつが、椅子に座った状態でピン球を転がし、3 打以内で相手コートに返球します。これらの工夫は、全ての人がスポーツに参加する「共生空間」を

生み出すためのマネジメントになります。翻って、インクルーシブなスポーツ環境とは、障害のある人とない人が同じ場所でスポーツを行う取り組みであって、障害のある人の参加形態は、ボランティアなど補助者がついて活動すること、自立して活動することなど様々です。

研究のスタイルとしては、障害者スポーツの当事者、支援者、支援組織を対象に量的データを収集して、統計的手法を施し、実証的に明らかにしています。近年執筆した博士論文では、地域スポーツ、指導者養成、学校体育の3つを柱にインクルーシブなスポーツ環境における課題を探りました。2014年からは基盤研究(C)の助成により、スポーツ基本法や2020年東京パラリンピック開催を踏まえて、地域の公共スポーツ施設を利用する障害者のニーズや施設側の支援体制を検討しています。修士課程の指導教授であった山下秋二教授の退職記念号『立命館産業社会論集』第50巻第1号にて一部紹介させていただいておりますので、もしも興味がございましたら、ご笑読くださればと思います。また、来る6月18日(土)午後からは、以学館1号ホールにて、障害者スポーツを支える組織をテーマとした、日本体育・スポーツ経営学会の研究集会を開催いたします。どなたでも参加できますので、こちらでもお目にかかれまして幸いです。

さて、障害者スポーツの研究は「学際的

な実践研究」「現場との連携の重視」という特徴があります。ですので、研究は様々な分野の方々と協力し合って進めなければならず、その結果は障害者スポーツの現場に還元されることに意味を持ちます。実態を把握してエビデンスを構築することはスポーツ政策にも反映されるため、2015年度はスポーツ庁による「地域における障害者スポーツの普及振興に関する有識者会議」に参加しました。

実践を重視していることに関連しては、障害者スポーツのボランティアをライフワークとしていますので、現在も兵庫県や神戸市を中心に各大学や専門学校と連携して、多くの学生が障害者スポーツの現場を経験できるような取り組みを支援しています。(公財)日本障がい者スポーツ協会、障がい者スポーツ指導者協議会の活動にも研修担当として関わっています。今後は産業社会学部においても京都市と連携して、そのような活動ができればと考えています。

最後になりましたが、私は民間企業から神戸市の総合福祉ゾーンにてスポーツ関連事業所のマネージャーを経験し、障害者優先スポーツ施設や健康増進施設の民間業務委託(現在の指定管理)事業を立ち上げたのちに大学教員として採用されました。私がインクルーシブなスポーツの環境にこだわる背景には、公共スポーツ施設のマネジメントの現場で、障害の有無、年齢、国籍

等を超えて多くの方々と関わった経験があります。

産業社会学部には、3つの法人と2つの大学での専任教員を経て、迎え入れていただきました。これまで保育学、教育学、共通教育科目を担当してきましたが、自分自身の専門研究、教育、実践と向き合える初め

ての機会を与えていただきました。

障害のある人のスポーツに理解が深い環境においては、これまでの経験を生かして貢献できるよう邁進したいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

みとま としゆき
三笥 利幸



本年4月より産業社会学部現代社会専攻に着任いたしました三笥利幸と申します。「社会学史」、「基礎社会学」および基礎演習などの小集団授業を担当させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

出身は福岡——本籍地は大分県

日田市で、三笥という特徴的な名前もそこでは一定数います——ですが、1989年に大学に入学して以降、東京に住んでいました。常勤の職を得たのが偶然にも福岡県北九州市にある九州国際大学で、2005年に福岡に戻ることになりました。その後、九州国際大学に11年勤め、この春から立命館大学に赴任することになりました。まさか京都に、それも立命館大学に赴任するとは想像もしていないことで、すべてにおいて不案内な京都での生活をはじめるにあたり、正直なところ大学入学時よりも大きな不安をかかえていました。しかし、同僚の先生方にも親切にいろいろ教えていただき、また、事務職員の方々にも丁

寧にご対応いただいて、大きな困難にぶつかることもなく勤務することができています。皆様方にはほんとうに感謝申し上げます。

さて、私は「包摂／排除」という矛盾した力学が社会に生み出す諸問題への関心から、マックス・ヴェーバーを中心とした社会学理論および日本の社会科学におけるヴェーバー受容史を研究しています。理論的には、価値自由という研究・教育に関する方法論、ゼクテなどの集団形成の問題や人種、人権あるいは支配に関するヴェーバーの議論に特に関心を持っています。またこれと平行して、ヴェーバーが日本の社会科学理論に受容される様子も検討してきました。ヴェーバーは戦時期におおいに議論され、戦後言説の形成にも利用されてきました。そこからは、日本のナショナリズム、帝国主義あるいは植民地主義と骨がらみの受容の様子が見えてきます。ヴェーバー自身が展開したはずの概念や理論を肝心なところで捉え損ね、読み替え、利用していった受容史から、ヴェーバー理論のさらなる研究の必要と日本の社会科学のあり方をトータルに問う必要を感じています。

先に述べた「包摂／排除」の力学と

いう観点から、私は沖縄についても研究を行っています。沖縄は琉球併合以来日本に「包摂」されながら、先の戦争では「捨て石」とされ、現在でも基地問題に見られるような植民地的な「排除」に苦しめられています。「包摂／排除」という暴力に対して沖縄の側からどういう学的営みがあったのか、それを伊波普猷をはじめとする沖縄の研究者の、19世紀から20世紀の世紀転換期の言説を中心に検討することで明らかにしようとしています。

さて、私の研究について概略を述べてきたところで唐突なようですが、私はそもそも研究者それも理論や思想の研究者になろうとは思っていませんでした。大学に入って間もない頃までは、理論などの机上の議論をするのではなく、現実社会の紛争、貧困、差別などの問題を現場から伝えるジャーナリストに憧れのようなものを持っていました。今から思えば我ながら幼稚な発想だと思うのですが、そうした幼稚な私は程なく、学問研究に徹しつつそれを現実社会の実践的問題への批判的議論とする方途を探る――「価値自由」の問題に取り組む――マックス・ヴェーバーに出会うことになりました。それ以来、ずいぶん道を逸れて(!)現在に至っています。こ

の度、私は社会学史を担当することになっていますが、そこでもいわゆる理論の紹介に終わらず、たえず理論と現実社会とがどう切り結ばれてきたのか、学史を踏まえて今日の社会を

どう捉えるのか、といった点まで含めて学生諸君とともに考えていこうと思っています。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

「これから」を創っていききたい。若者たちとともに。

た お な お き
田 尾 直 樹



本年4月から産業社会学部人間福祉専攻に着任しました田尾直樹です。皆様方、よろしくお願いいたします。授業担当科目は、「社会福祉援助技術演習／実習指導／現場実習」です。また、社会福祉実習指導室の副室長として、社会福祉士養成課程を履修する学生の国家試験受験資格の取得支援、及び社会福

祉現場を始めとする進路・就職をサポートする役割をいただいています。

着任後、早や1カ月を経過しましたが、この間は手探り状態で、実習指導に関わる先輩教員の先生方や実習指導室の専門職主事さん、学部事務室の職員さんなどに諸々のことをお尋ねしながら、何とか「軌道」を見つけてつつある（まだ乗りきれてはいません）段階です。

前職は京都府社会福祉協議会に勤務しておりました。1976年に本学産業社会学部を卒業し、社会福祉協議会（以下、社協）に就職して以来、職場は京都府社協しか経験していない「社協馬鹿」（かつての上司役員から評された言葉）です。

大学時代の恩師は故真田是先生です。私は落ちこぼれ学生でゼミにもあまり出席していませんでしたが、先

生のオーラのお陰で京都府社協に就職することができ、70年代後半から40年間、社会福祉政策動向に直結した影響を受けやすい組織の中で、様々な風雨に翻弄されながら、しかし多彩な人々との出会いや教えを得て鍛えていただきました。若い時は、先生の教えの一端としては多分外れていない労働組合運動(全国福祉保育労働組合)の役員も相当のめりこんで活動しました。このたびは立命産社にお世話になることとなり、真田先生がご存命だったら伊の一番にご報告したかったところですが叶いません。落ちこぼれ真田ゼミ生としては、その罪滅ぼしとして、先生が亡くなられ、先生の奥様もお亡くなりになった今も「真田ゼミ同窓会」(不肖私が会長)を継続しており、昨秋の産社50周年の記念事業の際には、久しぶりにゼミ同窓会を開催し、会の活動継続を約束したところです。

産社にはお世話になってきた先生方が大勢おられます。石倉先生(ゼミの先輩でもあり京都府社協人材センターの業務で社会福祉従事者の処遇問題等の調査研究をお願い)、津止先生(同い年がかつて社協の仲間でもありましたし何度も地域福祉の講師にお招き)、中村学長補佐(理事長をされているきょうとNPOセンター

で私はかつて理事の末席に)、小川先生(つい昨年ホームヘルパーの調査研究で業務レベルのご指導を得た)、野田先生(昨年度、短時間の勤務でしたが私がスクールソーシャルワーカーに従事したときのスーパーバイザー)、小澤先生(共同代表をされているネットワークモアの私は一会員)、黒田先生(京都府北部の社会福祉実践著書のファン)といった具合です。

研究・教育を中心にとという原稿依頼でしたが、そちらで記すべき内実たるや心もとなく、よもやま話で紙幅が尽きますが、せめて研究領域の今後の抱負を述べますと、追究したいターゲットは「社会福祉基礎構造改革と地域福祉」/「貧困・社会的孤立と地域福祉」/これらの政策課題及びソーシャルワークの現代的復権と実践的課題/というテーマを念頭に置いています。

最後に、この1か月の学生たちとの出会い・触れ合いを通じて本稿のタイトルフレーズがいま浮んでいて、私を鼓舞しています。学生たちの・社会福祉実習指導室の・私自身の「これから」を“教職協働”で創っていきたいと思います。

どうぞ、今後のご指導・ご鞭撻をよろしく願いいたします。

< 自著紹介 >

坂本 利子 著

『 ナディン・ゴードィマが描いた南アフリカ社会 一人種，ジェンダー，セクシュアリティが交差する国家と家族のポリティクス 』

坂本 利子



第三書館

(2016 年 3 月 25 日発行)

本書は、南アフリカ共和国(以下、南アフリカ)のユダヤ系白人女性作家ナディン・ゴードィマが描いた南アフリカ社会の特徴を、人種，ジェンダー，セクシュアリティの諸概念が交差する地平と、南アフリカ国家とそこに生きる様々な家族のポリティクス

クスを座標軸に明らかにしています。ゴードィマの作品には、南アフリカにおける植民地支配の歴史と、厳しい人種差別政策をとったアパルトヘイト(人種隔離)体制の影響により、複雑な人種関係，ジェンダー関係，そして性関係と，それらに深くかわって様々な家族関係が描かれています。ゴードィマが書いた小説，短編集，評論，対談などを読みながら，南アフリカ社会の特質を浮き彫りにすることを試んでいます。本書は，アパルトヘイト体制下の南アフリカは，1961 年にイギリス連邦から脱退し，政治上は独立国であったとはいえ，近代化，工業化のプロセスをとおして，政治，経済，文化など社会のあらゆる側面で，少数の白人が，黒人を中心とする大多数の非白人を支配し人権を奪っていたという意味で，植民地社会であったという前提で論じています。そしてゴードィマが描いた南

アフリカ社会は、アパルトヘイト下の植民地状況を反映し、ポストアパルトヘイトの作品にも引き続きその影響が見られます。

ゴードイマは、1923年にジョハネスバーグ郊外の金鉱山の町スプリングスに生まれ、13歳の時に初めて書いた物語、‘The Quest for Seen Gold’ (1937)がジョハネスバーグの *Sunday Express* 紙に掲載されて以来、2012年に発表した最後の小説 *No Time Like The Present* まで、75年もの長い年月、創作活動に従事していました。彼女の作品は、南アフリカのアパルトヘイト体制下とポストアパルトヘイト時代の世相とその変遷を色濃く反映しています。本書で取り上げている作品は、1913年の原住民土地法から始まったアパルトヘイト政策が、第二次世界大戦後の1948年の総選挙で国民党が勝利したのち、数々のアパルトヘイト法整備により更に体制が強化推進された1950年代、厳しい抑圧の1960年代、黒人意識高揚と反政府運動が激化し、政府の弾圧が暴力化した1970年代、国際社会からの経済制裁と南アフリカの孤立に続いてアパルトヘイト体制が弱体化した1980年代、そして1990年代初めのアパルトヘイト体制崩壊とその後のポストアパルトヘイトに至る時代を描いています。

南アフリカでは1994年に初の全人種参加の総選挙により、ネルソン・マンデラが

南アフリカ初の黒人大統領となり、反アパルトヘイト闘争を主導したアフリカ民族会議(ANC)を第一党とする国民統合政府が誕生しました。こうして統治体制がアパルトヘイトの絶対主義から民主体制に移行して以来、約20年が経過した2013年12月にマンデラが他界すると、その約半年後の2014年7月にナディン・ゴードイマも90年の生涯に幕を閉じています。

本書では、南アフリカ社会の人種、ジェンダー、セクシュアリティの諸問題が国家と家族の領域でどのように政治的影響を及ぼし、南アフリカ社会の現実派に派生するそれらの問題の影響を、作家ゴードイマがどのように創造的に描いたかを読み解いています。南アフリカの生活におけるこれら3つの側面の相互関係は非常に重要であるため、ひとつの側面だけを切り離して考察することは不可能であると考えます。その理由は、人種、ジェンダー、セクシュアリティの相互の関連性が、南アフリカへのヨーロッパ人入植と、それに続くヨーロッパ人、先住民、そして奴隷の間の人種混合に起因する複雑な関係性を引き起こしてきた歴史的状況を背景に、17世紀から20世紀の間にこの地域で発展した人種間の序列と、その序列に意味付けをした経済システムが、南アフリカにおける人種関係、ジェンダー、そしてセクシュアリティを規定してきたからです。したがって本書は、

人種、ジェンダー、セクシュアリティのポリティクスに焦点を当て、南アフリカの社会的、経済的、政治的序列全般から派生する権力関係を扱っています。

南アフリカでは白人の入植と植民地開拓は、主に男性のプロジェクトであり、家族はその国の広範囲にわたるポリティクスだけでなく、入植者コミュニティの家父長的状况を反映してきました。本書は、南アフリカの歴史的事象を背景に、ゴードイマの著作のさまざまな段階において、白人、黒人、カラード、反政府活動家、ヨーロッパからの移住者、その他多様な家族の文脈で、人種、ジェンダー、セクシュアリティが相互に関連しあう領域を分析し、家族のポリティクスがより広範な社会的、政治的構造とどのようにつながっているかを考察しています。本書はまた、南アフリカの白人として、そしてアパルトヘイト時代には異人種間の接触が法律で厳しく制限されていた社会的枠組みの中で生きる女性として、南アフリカ社会を描く上でゴードイマ自身の立場から生じる曖昧さや限界も明らかにすることを試みています。

筆者は白人女性作家が描いたアフリカに、ドリス・レスリングが初めて書いた小説

『草は歌っている(*The Grass is Singing*)』(1950年)で1980年代に出会って以来、オリーブ・シュライナーの『アフリカ農場物語(*The Story of an African Farm*)』(1883)やカレン・プリクセンの書いた『アフリカの日々(*Out of Africa*)』(1937)、そしてナディン・ゴードイマが南アフリカ社会を描いた作品を読み続けてきました。ナディン・ゴードイマの描いた南アフリカ社会について書いた博士論文の審査の口頭試問で、最後に尋ねられたのは、「あなたはアフリカ文学にどのような貢献ができると思いますか?」という質問でした。私は「私の母国日本では、アフリカ文学はまだマイナーが学問領域なので、日本でアフリカ文学をもっと紹介していきたい」と述べました。今回私がこれまで主に英語で発表してきた論文をまとめ、日本語で刊行するという希望をようやく叶えることができました。アフリカ文学とは?とあまりなじみのない方にも読んでいただけたら嬉しいです。

本書は、2015年度立命館大学産業社会学会による学術図書出版助成を受けて出版されました。ここに深く感謝の意を表したいと思います。

飯田 豊 著

『テレビが見世物だったころ ―初期テレビジョンの考古学』

飯田 豊



青弓社

(2016 年 3 月 18 日発行)

『テレビが見世物だったころ』という書名は、加藤秀俊氏が今から半世紀以上前、1965 年に著した『見世物からテレビへ』（岩波新書）を念頭に置いたものである。この本の中で加藤氏は、見世物をはじめ、影絵や写し絵、パノラマや絵葉書、紙芝居や活弁といった視聴覚文化の伝統が、放送文化に継承されていることを多角的に論じている。「わたしは、日本の映像芸術を、映画にはじまりテレビに発展したという単純な文脈で考える通説に反対する。

われわれの映像史は、もうちょっと長く、かつ複雑なのだ」（『見世物からテレビへ』36 頁）。

この見解に全面的に同意した上で、本書ではテレビの歴史を、博覧会や展覧会の中で成熟した見世物文化との相互作用を手掛かりに編み直している。テレビに関する歴史記述は、1953 年における本放送の開始——特に街頭テレビの登場——から始まるのが定番である。しかし本書では、ラジオの全国放送網が成立する 1928 年ごろから、太平洋戦争が勃発する 1941 年まで、実用化を目指して研究が進められていたテレビジョン技術が、博覧会や展覧会における公開実験、あるいは戦時下における実験放送を通じて、繰り返し一般に公開されていたことに注目し、単なる「前史」ではなく、技術の「社会史」として、定時放送の開始に先立つ出来事の意味を検証してきた。すなわち、われわれが慣れ親しんできた「テレビ」のあり方を前提として、その歴史を遡及的に捉えるのではなく、かつて「テレビジョン」という技術に開かれていた可能性の系譜を、本書

では詳らかに記述している。

本書の構成は次のとおりである。1章「アマチュアリズム ―「趣味」のテレビジョン」では、日本のアマチュア無線家たちが1930年前後、テレビジョンにどのように関心を向けたのかを解明した。かつてラジオの誕生に立ち会い、その可能性に魅了されたアマチュアたちは、通信省の統制下で無線技術が次第に硬直化していくなか、ようやく欧米で芽生えつつあったテレビジョン技術にいち早く関心を向け、(ブラウン管を用いない)機械式の試作機を公開していた。

2章「パブリック・ビューイング ―早稲田大学の劇場テレビジョン」では、早稲田大学が開発した機械式テレビジョンの公開実験に焦点を当てた。30年代初頭、スクリーンに映像を投影する大型のテレビジョンを開発した早稲田大学は、大学キャンパス内にある戸塚球場から、無線による大学野球の実況中継に成功し、博覧会場の群衆を大いに驚かせた。今でいうパブリック・ビューイングの可能性が提示されていたのである。

3章「テクノ・ナショナリズム ―通信省電気試験所のテレビジョン電話」では、通信省電気試験所が開発した機械式テレビジョンの公開実験に焦点を当てた。30年代なかば、電気試験所は約3年のあいだに、北は樺太から南は台湾まで、統治

下を含む全国18会場において、のべ400日以上を公開実験に費やしている。その目玉として活用されたのがテレビジョン電話であり、監視装置としての可能性が、テクノクラシー思想と結びついて提示されていたのである。

4章「皇紀二千六百年 ―日本放送協会の実験放送」では、日本におけるテレビジョン開発がブラウン管方式に一本化されて以降、1940年前後における日本放送協会の実験放送に焦点を当てた。従来の放送(局)史の視角においては、総動員体制下の抑圧的な状況は、テレビジョンの研究開発にとって「挫折」や「断層」として強調されるが、テレビというメディアの今日的様態はむしろ、太平洋戦争が間近に迫った非常時局に形成されていたのである。

5章「戦後への遺産 ―NHK、日本テレビ、そしてアマチュア」では、戦後に再開された公開実験に焦点を当てた。戦前からの連続性に着目し、街頭テレビが登場するまでの経緯を辿るとともに、受像機を趣味で自作するアマチュアが出現し、本放送の実現を強く後押ししていく過程を描いた。

この研究に取り組んで10年以上が経過したが、そのあいだにテレビを取り巻く状況は激変した。戦前の出来事を中心に扱ってきたにも関わらず、テレビやイン

ターネットの今日の変容に強く引き付けられた結果、本書の執筆過程でさまざまな論点が新たに浮上してきた。映像端末が急速に多様化し、日常生活のいたるところにスクリーンが遍在している現在、テレビのあり方が急速に拡散していく中で、逆に、いくつもの「テレビジョン」がひとつの「テレビ」に収斂していった過程をたどることが、広い歴史的構図のもとでテレビの将来を展望する手掛かりになるのではないかと考えるようになったのである。

ところで、本書を執筆するまで加藤秀俊氏とは面識がなかったのだが、書名にピンときた知人が、加藤氏とのあいだを仲

介してくださった。先日初めてお目にかかって、本書を直接お渡しすることができたのだが、そのさい開口一番「テレビはもう考古学の対象になっちゃったんですね」と笑っておっしゃられた。もちろんテレビが絶滅するわけではなく、本書の副題は、英語圏で「メディア考古学（media archeology）」と呼ばれるアプローチを念頭に置いたものである。

そして最後に、本書の刊行にあたっては、産業社会学会の2015年度学術図書出版助成を受け、学会の関係各位にはひとかたならぬお力添えをいただいた。深く謝意を表したい。

Zapping 原稿募集

研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

原稿は s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付していただきますようよろしくお願いします。